

7.14 [木]	第560回 定期演奏会 サントリーホール／19時開演
	Subscription Concert, No. 560 Thursday, 14th July, 19:00 / Suntory Hall

指揮／**コルネリウス・マイスター** Conductor CORNELIUS MEISTER **P.5**

コンサートマスター／**小森谷巧** Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ハイドン **交響曲 第6番** ニ長調 〈朝〉 [約24分] **P.8**

HAYDN / Symphony No. 6 in D major “Le Matin”

- I. Adagio – Allegro
- II. Adagio – Andante – Adagio
- III. Menuet
- IV. Allegro

[休憩 Intermission]

マーラー **交響曲 第6番** イ短調 〈悲劇的〉 [約80分] **P.9**

MAHLER / Symphony No. 6 in A minor “Tragische”

- I. Allegro energico, ma non troppo
- II. Andante moderato
- III. Scherzo
- IV. Finale

【主催】 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
【助成】 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
【協力】 **アフラック**（アメリカンファミリー生命保険会社）
〈サントリーホール30周年記念参加公演〉



7.18 [月・祝]	第90回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演
	Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 90 Monday, 18th July, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall
7.19 [火]	第594回 名曲シリーズ サントリーホール／19時開演
	Popular Series, No. 594 Tuesday, 19th July, 19:00 / Suntory Hall

指揮／**コルネリウス・マイスター** Conductor CORNELIUS MEISTER **P.5**

ヴァイオリン／**バイバ・スクリデ** Violin BAIBA SKRIDE **P.7**

コンサートマスター／**長原幸太** Concertmaster KOTA NAGAHARA

ベートーヴェン **ヴァイオリン協奏曲** ニ長調 作品61 [約42分] **P.11**

BEETHOVEN / Violin Concerto in D major, op. 61

- I. Allegro ma non troppo
- II. Larghetto
- III. Rondo : Allegro

[休憩 Intermission]

ブラームス **交響曲 第2番** ニ長調 作品73 [約43分] **P.12**

BRAHMS / Symphony No. 2 in D major, op. 73

- I. Allegro non troppo
- II. Adagio non troppo
- III. Allegretto grazioso (Quasi andantino)
- IV. Allegro con spirito

【主催】 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
【助成】 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）（7/19）
【協力】 横浜みなとみらいホール（7/18）
〈サントリーホール30周年記念参加公演〉（7/19）



7.23 [土]	第189回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 189 Saturday, 23rd July, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
7.24 [日]	第189回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 189 Sunday, 24th July, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／アレクサンダー・リープライヒ

Conductor ALEXANDER LIEBREICH P.6

ピアノ／牛田智大

Piano TOMOHARU USHIDA P.7

コンサートマスター／日下紗矢子 Concertmaster SAYAKO KUSAKA

メンデルスゾーン 序曲〈フィンガルの洞窟〉 作品26 [約10分] P.13

MENDELSSOHN / "The Hebrides" Overture, op. 26

ショパン ピアノ協奏曲 第2番 ヘ短調 作品21 [約32分] P.14

CHOPIN / Piano Concerto No. 2 in F minor, op. 21

- I. Maestoso
- II. Larghetto
- III. Allegro vivace

[休憩 Intermission]

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調 作品67〈運命〉 [約31分] P.15

BEETHOVEN / Symphony No. 5 in C minor, op. 67

- I. Allegro con brio
- II. Andante con moto
- III. Allegro
- IV. Allegro

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 参文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
[事業提携] 東京芸術劇場

コルネリウス・マイスター

Cornelius Meister

人気抜群のドイツの若手
待望の再共演が実現

音楽の都ウィーンを舞台に、
コンサートとオペラの両方で大
車輪の活躍を続ける人気抜群の
若手指揮者。読響と2度目の共
演となる今回、ハイドン、ベート
ーヴェン、ブラームス、マーラー
というドイツ正統派のプログラム
で実力を発揮する。

1980年ドイツ・ハノーファー生まれ。
ハノーファー音楽大学でピアノと指揮を
学び、21歳でハンブルク国立歌劇場に
デビューを果たした。2005年に24歳
でハイデルベルク市立劇場の音楽総監
督に就任、12年まで7年にわたってそ
の職にあった。10年からウィーン放送
響の首席指揮者兼芸術監督を務めてい
る。ムジークフェライン（楽友協会）や
コンツェルトハウスなどでのコンサートを
始め、日本を含む世界各地へのツアー
やレコーディングなど、積極的な活動
が高く評価されている。



©読響

これまでにロイヤル・コンサートヘボ
ウ管、バイエルン放送響、パリ管などと
共演。オペラの分野ではウィーン国立
歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、ミラ
ノ・スカラ座、英国ロイヤル・オペラな
どに登場。日本では06年に新国立劇
場で〈フィデリオ〉を指揮している。

17年度より読響首席客演指揮者に就
任予定（詳細は29頁に記載）。18/19
シーズンからカンブルランの後任とし
て、シュトゥットガルト歌劇場の音楽総
監督に就任することが発表された。

◇ 7月14日 定期演奏会
◇ 7月18日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
◇ 7月19日 名曲シリーズ

アレクサンダー・リープライヒ

Alexander Liebreich

才気^{かんぱつ}煥発な実力派
読響と初共演

ドイツ・ミュンヘンで聴衆から熱狂的な支持を集めている実力派指揮者。読響初登場の今回は、ショパンのピアノ協奏曲第2番(独奏・牛田智大)とベートーヴェンの〈運命〉という名曲の組み合わせで腕を振るう。

1968年ドイツ・レーゲンスブルク生まれ。ミュンヘン音楽演劇大学とザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学に学び、アバドとギーレンの薫陶^{くんとう}を受けた。96年にキリル・コンドラシン国際指揮者コンクールで優勝。オランダ放送フィルでデ・ワールトのアシスタントを務め、ロイヤル・コンサートヘボウ管やBBC響、ミュンヘン・フィルを指揮して国際デビューを果たした。

2006年からミュンヘン室内管の音楽監督兼首席指揮者を務め、鮮烈な指揮と野心的なプログラム、幅広いレパートリーで高い評価を得ている。12年には



©Marek Vogel

ポーランド放送響の芸術監督兼首席指揮者にも就任した。これまでにバイエルン放送響、ハンブルク北ドイツ放送響、シュトゥットガルト放送響、ベルリン放送響、N響などに客演し、ヴァイオリンのリサ・バティアシュヴィリやマキシム・ヴェンゲーロフらと共演している。

15年ポーランド国立放送響と、ルトスワフスキとシマノフスキの作品が入ったCD2枚をリリース。評論家と聴衆から高い評価を獲得し、話題を呼んだ。

◇ 7月23日 土曜マチネシリーズ
◇ 7月24日 日曜マチネシリーズ

A rist of the month

今月のアーティスト



©Marco Borggreve

ヴァイオリン バイバ・スクリデ

Violin Baiba Skride

ラトヴィア・リガ生まれ。5歳からヴァイオリンを始め、95年にドイツへ移った。2001年にエリザベート王妃国際コンクールで優勝。これまでにマゼール、パーヴォ・ヤルヴィ、ビエロフラーヴェクらの指揮の下、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管、ミュンヘン・フィル、ドレスデン・フィルなどと共演。室内楽にも活躍の場を広げ、共演者にはヴァイオリンのクレメルやカプソン、チェロのゲリンガス、フルートのパユらがいる。読響の14年6月の大阪定期演奏会で代役として急きょ出演し、圧倒的な成功を収めた。

◇ 7月18日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
◇ 7月19日 名曲シリーズ



ピアノ 牛田智大

Piano Tomoharu Ushida

日本期待の若手ピアニストとして注目を浴びる逸材が、満を持して読響との初共演に臨む。

1999年福島県いわき市生まれ。3歳でピアノをはじめ、8歳から5年連続でショパン国際ピアノコンクール in ASIAで1位入賞。2012年に浜松国際ピアノアカデミー・コンクールで、最年少で優勝し、同年にユニバーサルからCDデビューを飾った。国内各地でリサイタルを開き、15年6〜7月にはブレットニョフ指揮のロシア・ナショナル管日本公演でソリストを務めた。現在、モスクワ音楽院ジュニア・カレッジで学んでいる。

◇ 7月23日 土曜マチネシリーズ
◇ 7月24日 日曜マチネシリーズ

7.14 [木]

船木篤也 (ふなき あつや)・音楽評論家

ハイドン 交響曲 第6番 ニ長調 〈朝〉

作曲：1761年／初演：推定、1761年、アイゼンシュタット／演奏時間：約24分

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)は、しばしば「交響曲の父」と呼ばれる。それは、書いた数が100を超えるからというだけに留まらない。何よりもその実験的な創作過程で「交響曲のフォーマット」を定着させていったからであろう。第1楽章＝速い、第2楽章＝遅い、第3楽章＝舞曲系、第4楽章＝速い、といった型だけでも、ハイドンのたどりついた結論が、以後、作曲家たちの規範となったのである。

交響曲を書く機会は、後年になるとまた別のところからくるのだが、ハイドンは当初それを、1761年から仕えることになったハンガリーの貴族、パウル・アントン・エステルハージ侯爵のために書いた。侯爵おほかえの楽団は、まだごく小規模であったが、その当時から名うてのプレーヤーたちを含んでいたのである。

この初期段階で書かれた交響曲第6番、第7番、第8番には、それぞれ〈朝〉〈昼〉〈晩〉という題が付いている。自筆譜が現存するのは第7番だけ。しかし、これらがセットで書かれたであろうことは確実視されている。一連のタイトルもさることながら、3曲いずれもがプレーヤーに独奏者の性格を担わせた「協奏的作品」である点が、その最大の根拠となろう。

第6番に関していえば、日の出を連想させる第1楽章の序奏が〈朝〉の題の理由となりそうだ。牧歌的ムードを表現するフルートが活躍し、いかにも田園の朝を思わせる。第3楽章は典雅な舞踊、メヌエット。ゆっくりとした第2楽章と快速の第4楽章には、独奏ヴァイオリンのパートが設けられている。ハイドン自身が指揮をしながらこれを演奏した可能性もある。

楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット、ホルン2、チェンバロ、弦五部

マーラー 交響曲 第6番 イ短調 〈悲劇的〉

作曲：1903～04年／初演：1906年5月27日、エッセン／演奏時間：約80分

19世紀にすでに頂点をみた「交響曲」を、20世紀になってもなお書き継ごうとしたグスタフ・マーラー(1860～1911)。彼は、古典派のハイドンが打ち立てた交響曲の約束事を、さらにはベートーヴェンが九つの交響曲で越えてみせた一線をも、大きく踏み越えた。楽章を六つも並べたり、独唱者を途中でぽつとはさんだり……。

しかしいっぽうで、交響曲の伝統を、マーラーほど意識した人もいない。より正確に言うなら、伝統とあえて戯れてみせ、新時代を痛感させた人、となろうか。

交響曲第6番は、その最たるケース。第1楽章＝速い、第2楽章＝遅い、第3楽章＝舞曲系、第4楽章＝速いという構成は、いかにも伝統寄りだ。しかしその内部に、伝統からのさまざまな「ずれ」が潜んでいるのに気がつくた。本作においてずらされる最大にして肝要な伝統は、ずばり、「短調から長調へというドラマトゥルギー」である。

「ド・ミ・ソ」を鍵盤で弾いてみよう。聞こえてくるのは、おなじみの明るく、確固とした感じの和音だ。そのまま、真ん中の音「ミ」だけを半音下げて弾いてみるとどうか？ なんとなく暗く、不安げな響きがするだろう。この違いを楽語を用いて言うと、根音を同じくする長三和音と短

三和音の違いとなるが、いま大まかに、長調の響きと短調の響きの違いと言っておく。思えば交響曲のドラマトゥルギーにおいては、「短調で始めたら長調で締める」というのが定石であった。なんといっても、ハ短調で始まりハ長調で終わる有名なベートーヴェンの第5交響曲の存在が大きい。あの「苦悩から歓喜へ」という構成を、以後、シューマンもブルックナーも、短調で始める場合は踏襲した。ブラームスは、1曲(第4番)これに反しているけれど。

さて、マーラーは、たんにこれに反してみせただけではない。長調になろうとしてもなれない——そんなものがきを、この第6交響曲で大々的にデモンストレーションしてみせたのである。

基本となる方法は、いたってシンプル。先ほどの「真ん中だけ半音下げる」がそれである。この交響曲は、開口一番、闘争的なマーチのリズムで短調の音楽(第1主題)を進めてゆくのだが、それを2台のティンパニが軍楽リズムで締めくくろうとする瞬間にもう、最初のそれが起こる。トランペットに、ぱっと長調の響きが点ったかと思うと、それがさっと短調の響きに戻ってしまうのだ。まるで、「苦悩から歓喜へ」という物語は最初から挫折することが運命づ

7.18 [月・祝]

7.19 [火]

柴辻純子 (しばつじ じゅんこ)・音楽評論家

ベートーヴェン

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品61

作曲：1806年／初演：1806年12月23日、ウィーン／演奏時間：約42分

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770～1827) のヴァイオリン協奏曲は、メンデルスゾーン、ブラームス、チャイコフスキーの協奏曲と並ぶ名曲で、雄大さと甘美な歌心を備えた傑作である。

この作品は、10歳年下のウィーンのヴァイオリニスト、フランツ・クレメントのために作曲されたが、直前まで曲は完成せず、リハーサルも十分でないまま本番を迎えた。そのため初演の^{かんば}評判は芳しくなく、再演もされたが、当時は注目を集めることはなかった。

再び脚光を浴びるのは、1844年にロンドンでメンデルスゾーンの指揮で、ヨーゼフ・ヨアヒムが取り上げてからである。独奏ヴァイオリンはオーケストラと有機的に結びつき、技巧だけでなく、深い音楽的洞察が必要とされる難曲だが、わずか13歳のヨアヒムは完璧に演奏した。以来、ヨアヒムによって演奏会でたびたび取り上げられ、若

き日のブラームスもその演奏に感銘を受けた。後にブラームスがヴァイオリン協奏曲 (1878) を作曲した際も、この曲から影響を受けたと言われている。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロッポ、ニ長調 ティンパニの4音連打に導かれ、オーケストラの力強い音楽が始まり、しばらくすると独奏ヴァイオリンが輝かしく登場する。美しいトリルや音階的な走句などがちりばめられているが、全体は冒頭の4音のリズム動機で引き締められている。

第2楽章 ラルゲット、ト長調 弱奏で安らぎに満ちた美しい主題が示され、三つの変奏曲が続く。独奏ヴァイオリンは、オーケストラと静かな対話を繰り返し、切れ目なく終楽章に入る。

第3楽章 ロンド：アレグロ、ニ長調 ここまでの滑らかな二つの楽章とは対照的に、快活なロンド主題が提示され、新しい主題をはさみ華やかに展開する。

楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

けられている、と言わんばかりである。

もちろん、80分にも及ぶこの交響曲には、そこかしこに長調になる場面が置かれている。ポイントは、そんな長大な時間経過において、あの「真ん中だけ半音下がる」事件が、何度も何度も襲ってくる点にある。

第6交響曲における伝統との違い・距離は、ほかにも見られるが、あと一つだけ、楽器編成を挙げておこう。とりわけ打楽器の種類の多さが尋常ではない。そこには「楽器」とは呼べぬカウベル (放牧の牛の首につける大きな鈴状のベル) や、ハンマー (木槌) も見える。ハイドンから、ずいぶん遠くに来たものだ。

本作が書かれたのは1903年から翌年にかけて。マーラーがウィーン宮廷歌劇場の芸術監督として精力的に活動していた頃で、作曲家としての名声も高まり、才色兼備で鳴らしたアルマ・シントラーとも結ばれ、二人の子どもを授かるという、まさに幸福の絶頂に彼はいた。

第1楽章 行進曲風の第1主題はイ短調。古くから、悲しみや嘆きを表すとみなされている調である。讃美歌風のパッセージを経て現れる第2主題は、対して幸福感に満ちたニ長調。ただし、そこにも行進曲が混入してくる。楽章なかほど、カウベルが遠くから聞こえてくるシーンは、マーラーによれば、高み

を目指すさすらい人が抱く「地上の遥けさの感情、極限の孤独を表現している」。

第2楽章 「真ん中だけ半音下がる」が出てこない唯一の楽章。子守歌と夜想曲があわく混じり合ったような、穏やかな、しかしいびつの美をも含んだ音楽。転調がもたらす、寄せては返す感情の波がすごい。なお、本楽章とスケルツォ楽章のどちらを先に置くべきか、マーラーは大いに迷ったようだ。

第3楽章 スケルツォ (冗談) と称した3拍子の音楽。これもベートーヴェン以来の「伝統」だ。ゆるやかな、とぼけた感じのトリオ部が2種はさまる。「真ん中だけ半音下がる」の出現率が、終わりのほうで高まる。

第4楽章 細密な音色、断片にかたむく傾向——導入部を聴くだけでも、20世紀の幕開けを実感するだろう。阿鼻叫喚^{あびきょうかん}というにふさわしい破滅的な音楽である。「真ん中だけ半音下がる」は楽章中再三現れるが、衝撃的なのは、なんといっても幕切れ。ティンパニの軍楽リズムとともに突発的に鳴るその和音は、最初から短調の響きであり、もはや一瞬でさえ長調にならない。歓喜の可能性はついに根絶された、というわけである。たんに「第6」と番号付けしたこの交響曲を、〈悲劇的〉と呼ぶことにマーラー自身同意したふしがあるのだが、それもむべなるかな。

楽器編成／フルート4 (ピッコロ持替)、ピッコロ、オーボエ4 (イングリッシュ・ホルン持替)、イングリッシュ・ホルン、クラリネット4 (エスクラリネット持替)、バスクラリネット、ファゴット4、コントラファゴット、ホルン8、トランペット6、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器 (グロッケンシュピール、シロフォン、小太鼓、銅鑼、大太鼓、カウベル、ハンマー、トライアングル、シンバル、ルーテ、低音の鐘)、ハープ2、チェレスタ、弦五部

ブラームス 交響曲 第2番 ニ長調 作品73

作曲：1877年／初演：1877年12月30日、ウィーン／演奏時間：約43分

1877年から3年間、ヨハネス・ブラームス（1833～97）は、夏の休暇をアルプスの山々に囲まれた、オーストリア南部のヴェルター湖畔のペルチャッハで過ごした。風光明媚なこの地でブラームスの創作の筆も進み、数々の名曲が生まれた。交響曲第2番もそのひとつで、明るく牧歌的で、親しみやすい旋律から「ブラームスの田園交響曲」とも呼ばれている。

自由でのびやかな雰囲気交響曲だが、ブラームスは、長年の苦心の末に完成させた交響曲第1番よりもさらに慎重に組み立てた。第1楽章冒頭のチェロとコントラバスによる3音音型（レード♯-レ）を統一動機とし、全楽章を関連づけて作り上げた。

初演は、12月30日にウィーンで行われ、大成功を収めた。第1番では音楽全体に漲る緊張感に戸惑いを隠せなかった音楽評論家たちからも、「聴く人の心に暖かい陽光を注いでくれる作品」（ハンスリック）と評されるなど、好意的に受け入れられた。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo、ニ長調 開始の3音音型に続いて、ホ

ルンと木管楽器による穏やかな第1主題が現れ、ヴィオラとチェロで憂いを帯びた第2主題がたつぷりと歌われる。様々な展開を経て、冒頭ののどかな音楽が再現され、ホルンの息の長い旋律で終結部に入る。

第2楽章 アダージョ・ノン・トロppo、ロ長調 孤独な内面を映し出すような緩徐楽章。チェロが息の長い、寂しげな主題を奏した後、ホルンが木管楽器の伴奏で甘い歌を歌う。中間部は、管楽器の優美な主題で始まり、次第にざわめき、不安な思いにかられる。

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ（クワジ・アンダンティーノ）、ト長調 オーボエの素朴で優しい旋律がチェロのピッツィカートにのせて歌われる主部と、弦楽器が活発に動き回る民俗舞曲風の音楽が交替する。

第4楽章 アレグロ・コン・スピリト、ニ長調 弦楽器による輝きに満ちた第1主題、朗らかな第2主題はいずれも3音音型に由来する。強弱の対比を明確にしながらかつ豊かな広がりをもって展開し、金管楽器が壮大なクライマックスを作り上げる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

7.23 [土]

7.24 [日]

道下京子（みちした きょうこ）・音楽評論家

メンデルスゾーン 序曲〈フィンガルの洞窟〉 作品26

作曲：1829～30年／初演：1832年5月14日、ロンドン／演奏時間：約10分

フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）は、ハンブルクでユダヤ系の裕福な家庭に生まれた。祖父モーゼスはカントとも交流があった哲学者で、父は銀行家。幼少の頃からフェリックスは幅広い豊かな教育を受けた。

1826年、メンデルスゾーンは17歳で序曲〈真夏の夜の夢〉を作曲するなど、早くから作曲家として認められているが、演奏や教育、研究の分野でも大きな足跡を残している。1829年にはバッハの〈マタイ受難曲〉の歴史的な再演を果たし、バッハ復興に大きく貢献した。さらに、1835年には名門ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者に就任し、この楽団の演奏レベルを向上させる。また、1843年にはライプツィヒ音楽院を創設。この学校は、当時ヨーロッパで最高水準の音楽教育機関として強い影響力を持ち、世界中から学生が集まった。

メンデルスゾーンは〈マタイ受難曲〉

を再演した1829年、イギリスをめぐる旅に出た。彼はヘブリディーズ諸島の孤島、スタファ島を訪れ、英雄フィンガルにちなんだ洞窟にも足を運び、その印象を音楽に書き留めた。母国の姉ファニーへ手紙とともに送られたこの音楽は、まさに序曲〈フィンガルの洞窟〉の冒頭部分である。作品は1830年にいったん完成をみたが、1832年にロンドンで初演されるまでの間に何度も改訂が施され、出版に至るまでの間にもさらに手が加えられた。ちなみに、当時のタイトルは「ヘブリディーズ諸島」で、欧米などでは現在でもその名で知られている。

作品（アレグロ・モデラート ロ短調）は演奏会用序曲。冒頭の主要主題はファゴットとヴィオラ、チェロによって奏でられる。作品を通して、波をイメージさせるような分散和音的な音型やトレモロが用いられ、荒波にもまれる洞窟を写實的に表している。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

ショパン ピアノ協奏曲 第2番 ヘ短調 作品21

作曲：1829～30年／初演：1830年3月17日、ワルシャワ／演奏時間：約32分

ポーランドを代表する作曲家フレデリック・ショパン（1810～49）は、フランス人の父とポーランド貴族出身の母との間に生まれた。6歳のころ、チェコ人のヴォイチェフ・ジヴニーにピアノを習い始める。彼のもとでのピアノ教育は、ショパンの音楽性の土台を形成した。

1829年7月にワルシャワ音楽院を卒業したショパンは、その月のうちにウィーンを訪れ、ケルントナートーア劇場で自作の〈ドン・ジョヴァンニの“お手をどうぞ”による変奏曲〉作品2と〈ロンド・ア・ラ・クラコヴィアク〉作品14を披露し、成功を取めた。

9月にワルシャワへ戻ったショパンは、ウィーンでの成功を確たるものにするため、2曲のピアノ協奏曲を作り、ともに1830年に完成させた。先に完成し初演されたのは第2番（ヘ短調）であるが、出版は第1番（ホ短調）が先んじて行われた。第2番は、1829年10月初旬に作曲が始められ、翌年3月にワルシャワの国民劇場で公の初演を果たした。演奏会は大成功し、5日後には追加公演が開かれた。

ショパンの時代、ピアノ協奏曲は作曲

家・ピアニストの力量を示す重要なジャンルであった。上述の〈ドン・ジョヴァンニの“お手をどうぞ”による変奏曲〉作品2と〈ロンド・ア・ラ・クラコヴィアク〉作品14などは、後のピアノ協奏曲の前段階をなすオーケストラ付きピアノ作品であり、ピアノ協奏曲に新たな表現の扉を開くものであった。その後続くピアノ協奏曲第2番では、フンメルやフィールドらのピアノ協奏曲の影響を受けつつ、ショパンの独創性が存分に発揮されている。なお、第2楽章は、ショパンが初恋の女性コンスタンツェ・グワドコフスカを想いながら創作の筆を執ったと言われている。

第1楽章 マエストーソ ヘ短調。ほの暗くも淡い詩情に包まれた楽章。第1主題を第1ヴァイオリンが、そして柔らかな光が差し込むような第2主題をオーボエが奏でる。

第2楽章 ラルゲット 変イ長調。甘美な旋律を、独奏ピアノがたっぷりと歌い上げてゆく。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ ヘ短調。フィナーレはロンド。主題には、ポーランドの民族舞曲であるオペレクのリズムが用いられている。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉

作曲：1807～08年、初演：1808年12月22日、ウィーン、演奏時間：約31分

ドイツ中西部のボンに生まれたルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）。1792年にボンへ立ち寄ったヨーゼフ・ハイドンに認められ、同年にウィーンへと移住する。ハイドンやアルブレヒツベルガーらに作曲を学びながら、音楽を愛好する貴族らに支えられたベートーヴェンは、本格的に音楽活動を行っていく。そのさなか、難聴の症状が進行し、1802年には二人の弟へ宛てた、いわゆる「ハイリゲンシュタットの遺書」をしたためる。失意の底から這いあがったベートーヴェンは、数多くの作品を書き上げた。同時に、彼の創作のスタイルは、壮大な「英雄様式」と言われるモニュメンタルな表現へと変化してゆく。

交響曲第5番は、作品全体を「運命の動機」と呼ばれる特定の動機で構築していく手法で書かれ、緊張に満ちたドラマティックな音楽に仕上げられている。第1楽章のハ短調に始まり、第4楽章のハ長調で終結する。短調が同主長調で締めくくられるこのような調の構成は、交響曲第9番へと受け継がれているのみならず、ブラームスの交響曲第1番のように、その後のいくつかの交響曲の土台となった。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

なお、弟子のシントラーはこの主題について、「運命はこのように扉をたたく」と作曲家が述べたと著しているが、いまではシントラーの作り話とされている。

なお、この曲が初演されたコンサートでは、交響曲第6番〈田園〉や〈合唱幻想曲〉も同時初演され、ベートーヴェンの創作の大きな節目を示す演奏会となった。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ ハ短調。曲の冒頭に轟く第1主題はあまりにも有名である。この主題の動機によって、楽章全体は緻密に築き上げられている。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 変イ長調。主題と三つの変奏からなる。付点リズムが醸し出す、ゆったりとした趣に包まれている。

第3楽章 アレグロ ハ短調。スケルツォ風の楽章であるが、コーダ（終結部）は、第4楽章への推移部と捉えることもできる。この部分で、第2ヴァイオリンとヴィオラは、ティンパニの刻みとともに保続音を鳴り響かせ、フィナーレへ流れ込んでゆく。

第4楽章 アレグロ ハ長調。ピッコロ、コントラファゴット、トロンボーンが加わり、勝利の凱歌を思わせるフィナーレに彩りを添える。